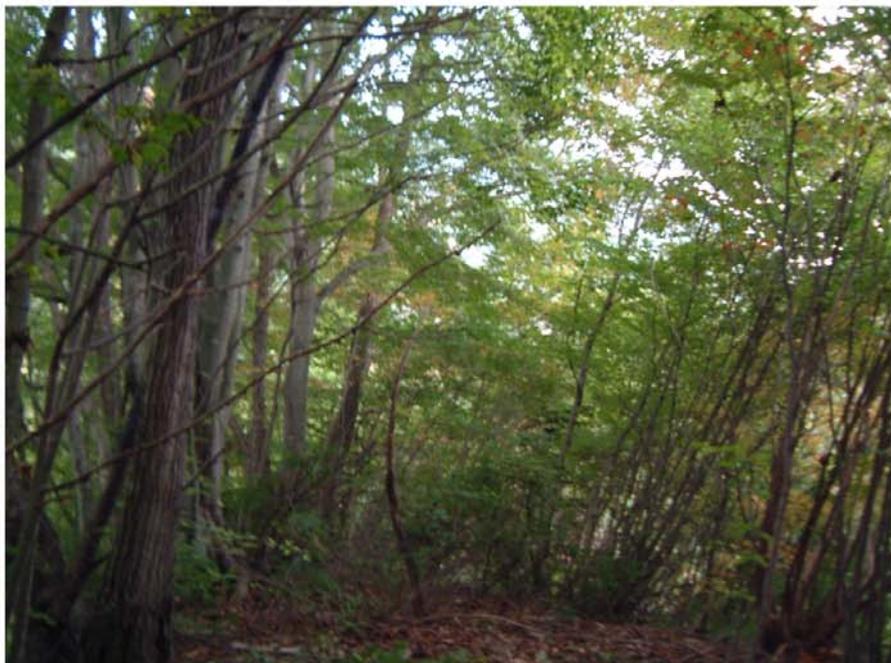


荒廃する身近な森林

作成：小野 婦喜子 (おの ふきこ／東京学芸大学 大学院2年)

寸評：山下 宏文 (やました ひろぶみ／京都教育大学 教授)*



▲荒廃する身近な森林 (写真提供：東京農業大学森林政策学研究室)

「さあ森林に行こう」と言われたとき、皆さんはどのようなイメージが浮かびますか。この写真を見てください。最近よく見かける森林の様子です。昼間なのに暗くて入りづらい感じがしますね。木漏れ陽を浴びて、動物たちの気配を感じて、走り回りたく、と皆さんが思い浮かべた森林とはほど遠いのではないのでしょうか。さまざまな原因か

ら人の手が入らなくなってしまう森林では、ひよろひよろした木々が絡み合い、立ったまま枯れてしまっている木もあります。陽が入らない中で育つことのできる植物は限られてしまい、その森に棲む動物も変わっていきます。近くの裏山で、薪や落葉や山菜を採り、木材を得るための木を育てていたほんの少し前までの人々の暮らしは、さまざまな場面で森林と密接に結びついていました。人々の日常的な利用によって保全された明るい森林には、そうした環境を好むたくさんの動植物も生きていました。

しかし現在、私たちの生活は、森林と深くつながりを持って生活していたころとは、ずいぶん変わりました。それでも多くの方が、森林に対して親しみを抱いていると言っています。人と森林、今どのようにかかわっていけばよいのでしょうか。」

○意図 (小野)：外国産材の市場進出や林業関係者の高齢化などにより現在の用材国内生産は圧迫され、また、人々の生活の変化は薪炭利用や落葉採取等を通じて深いかかわりを持ってきた里山の管理も困難にしている。こうした状況は、国土森林の約4割を占める人工林の管理を困難なものとしているばかりか、雑木林のような積極的な管理を必要とする森林が少なからず存在するという事実をも、人々の意識から薄れさせている。森林の働きを学ぶ単元において、自然林と人工林がバランスを取り、人の営為が育てる森林がわが国に多く存在する事実を伝えることにより、自然環境と社会環境双方への理解を深めることを期待する。

○寸評 (山下)：小学校第5学年の社会科が扱う「森林」は、国土保全や水源かん養の機能を果たす森林である。そのため、身近な所にある雑木林等の森林への着目が薄くなっていく傾向がある。しかし、街中に住む多くの人々が森林を実感できるのはそうした森林である。レクリエーションやボランティア活動の場として、直接のかかわりを持ちやすいのも街中やその周辺にある森林である。身近な所の森林の問題から国土の森林の問題へと認識を広げていく手法は、有効であると考えられる。